

# ダボス会議は暗黙知の宝庫？

一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授

いしくら ようこ  
石倉 洋子



1980年、バージニア大学大学院経営学修士(MBA)修了。1985年、ハーバード大学大学院経営学博士(DBA)修了。1985年からマッキンゼー社でマネジャー。1992年より青山学院大学国際政治経済学部教授、2000年より一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授。その他、商船三井社外取締役、公正取引委員会独禁法懇話会委員、世界経済フォーラム(ダボス会議)のフェロー等。専門は経営戦略、グローバル競争におけるイノベーション戦略。著書多数。

ICT(情報通信技術)が加速度的に進む中、ゲイブル等が世界の情報を体系化し、英語圏の大学や研究所がその知識資産をパブリックのために積極的に公開している。こうした情報や知識のほとんどは、文書化・デジタル化できる情報(形式知)だが、ICTがどれだけ進んでも、直感、ノウハウなど、主観的で同じ経験や物理的な場を共有しないと得られない主観的な知識(暗黙知)も重要だ。日本では特に、ロジカルな考え方や表現、分析を基盤とする形式知よりも、あうんの呼吸や共感、「同じ釜の飯を食った経験」などから得られる暗黙知を重要視する傾向が見られるようだ。

しかし、暗黙知は、日本だけ、日本人だけには限らない。たとえば、毎年一月にスイスのダボスで開かれる世界経済フォーラム(WEF)のダボス会議は、暗黙知の宝庫である。この会議は三〇年以上の歴史をもち、世界から数千人の政治家、実業家、学者、研究者、NPO、芸術家など多彩な分野を代表する参加者が、数日間にわたって世界の課題を議論する場である。朝七時から真

夜中まで、合計数百に達するセッションが平行して開かれ、貴重な知識創造・共有・転換の場が生まれる。公式セッションについては、会議のサマリーやビデオが、インターネットを通じて、世界に公開されるため、どこにいても見ることができるといった文書やビジュアルは形式知といえよう。

しかし、ダボス会議が価値を持つのは、この場が、暗黙知の宝の山だからである。そこに皆がいることから、数々のインフォーマルな出会い、話が始まる。多様なテーマについて、数々の発言や議論を聞き、自らも質問やコメントをするうちに、世界が向かっている方向、疑問や課題、対立点などがしだいに感覚としてわかってくる。もちろんいくらタフで積極的でも、朝食会から、並行セッション、ディナーや夜遅くまで開かれるレセプションすべてに参加することはできない。しかし、一日中、その場で議論に参加していると、まだはつきりした動きとはなっていない(したがって、記事やレポートなどにはなっていない)が、政界、学界、実業界、また国や地域の経済

開発段階、文化の違いを超えて、今、世界が重要と考えている課題、関心を持つ分野やテーマはこんな項目らしい、見解はこれだけ幅広いなどが体感できる。特に、ダボスではテーマや意見がひとつに集約することがなく、疑問や見解の相違がそのまま出て、それが議論の出発点となる。

最近特に、中国やインドが世界でも脚光を浴びる一方、日本からの情報発信が少なく、日本の存在感がうすくなっているという懸念がある。私の疑問は、G8サミットの数倍のレベルで世界のマスコミが報道するといわれ、世界に発信する理想的な場のひとつであるダボス会議がなぜ日本であまり報道されないか、会議に対する日本の関心がそれほどないか、また積極的に参加する人が少ないか、という点である。暗黙知を重要視すればこそ、またICT時代に鍵となる暗黙知の宝庫だからこそ、ダボス会議には大きな役割があり、それを日本でもよく知り、最大限活用すべきだと思う。

次号は、日本アイ・ビー・エム(株) 技術顧問、内永ゆか子氏にお願いします。



(敬称略) 小長啓一→野々内隆→根来泰周→石弘光→武藤敏郎→高橋温→増田寛也→西澤潤一→内田盛也→中原恒雄→今井敬→室伏稔→上島重二→西室泰三→依田巽→重延浩→吉村作治→中川武→池内克史→中島秀之→元村有希子→石倉洋子

※本コーナーは、弊会ホームページでもご覧頂けます。